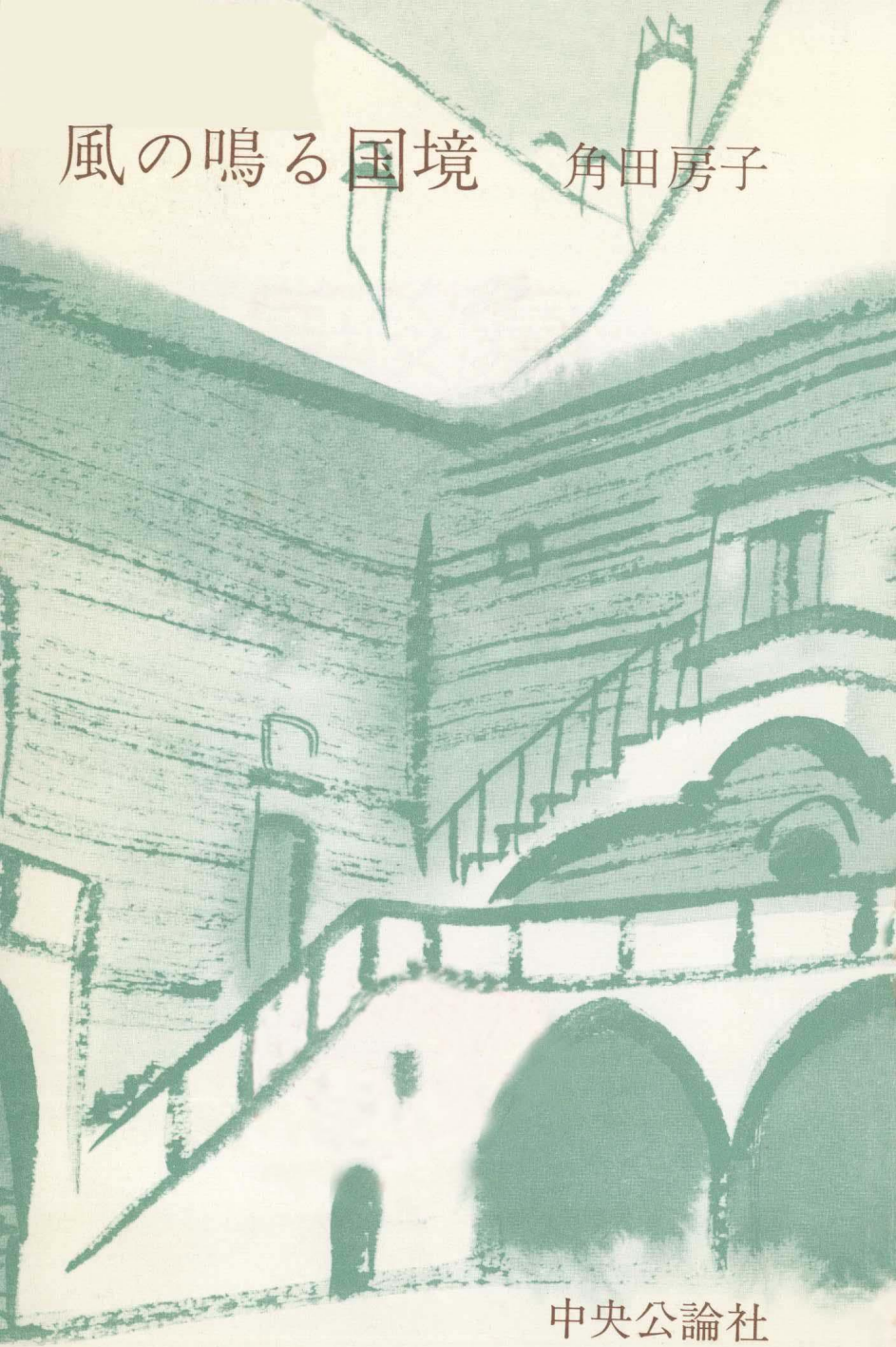
風の鳴る国境　自費出版

風の鳴る国境

角田房子



中央公論社

F 1

風の鳴る国境

© 1965

著　者　角田房子

昭和40年6月25日印刷
昭和40年6月30日発行

発行者　宮本信太郎
印刷者　草刈親雄

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2-1
電話(561)5921～9番
振替・東京34番

定価430円

検印廃止

風の鳴る国境

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

軽く体を突き上げるショックで旅客機は着陸し、フランスの土の固さが、覚悟をうながすように高辻明子の感覚に残った。

「やっと着いたわね」

隣席のはずんだ声にふり向いた明子は、西村早苗のかたちよく大きな唇に浮いた微笑が、緊張にこわばっているように思った。

「牧野っていうピアニストの卵、必ず出迎えに来ているはずよ。パパの会社が奨学金を出しているんですもの、来ないはずないわ。もう四年もパリにいるんだから、役に立つでしょ。同じ車で、さきにあなたを下宿まで送って上げるわ」

すでに何度も口にしたことを、早苗がまた早口に、念を押すように言った。仏文専攻の明子と違って、言葉もあまりできないピアニスト志望の早苗は、未知の世界への不安が急に目の前に迫るように感じていた。だが勝気な性分が虚勢となって、いつもよりいっそう相手をリードする強い口調になっていた。

飛行機が停止すると、日本人の旅客だけがいっせいに気ぜわしく立ち上がり、カメラやオーヴァーナイト・バッグなどをゴタゴタと動かしはじめた。機内に密閉された世界はまだ日本の延長だった。

扉を開かれた瞬間、オルリー空港の二月の朝の寒気がいきなり頬に切りつけるように迫った。日本の空気が逃げ去り、突如として目の下に拡がった西欧の世界に放り出される思いに、明子は気おくれを感じた。

空港ビルははるか遠くに見え、あちこちに停止している大小の機体はそれぞれ異なるマークをつけ、その間を色も形もさまざまな車が走り、人々もまた各自の目的に向かって忙しく動いていた。自分と関係のない飛行機の発着などは見向きもせず、ましてその中の一機からどんな旅客が降りたつかと注意を向ける気配などはなかった。明子は自分とかよいあう何ものも感じられない周囲に抵抗しながら、

フランスの土を踏んだ。
タラップの下に出迎えていた日本人スチュワーデスの柔らかい微笑と、帽子につけた日航の鶴の片羽の記章が、この広い国際空港の中でただ一ヵ所だけ明子に温かいものを感じさせた。空港ビルへ運ばれるバスの中も、滑る長い廊下を歩く時も、窓口に並んで入国手続きの順番を待つ間も、明子と早苗はほとんど口をきかなかった。
白く輝くような広いロビーの中を、二人は異国の人々に囲まれて流されるように出口へ進んだ。明子には周囲の何もかもがケタはずれに大きく見え、その中で動いている自分たち二人が、こっけいなほど小さく思われた。東京では揃って長身といわれていたのに、骨ぼその自分はとにかく、たくましいと思っていた早苗の肩までがどうしてこうもひ弱く見えるのかとふしぎにさえ感じられた。二人は同年の二十三歳だが、早苗の張りのある目をことさら誇張した濃い化粧のかたわらで、ほとんど素顔に近い明子はいつも年下に見られた。体つきも性格も、何もかも違う二人が、このロビーでは驚くほど多くの共通点でつながれた同国人であることを明子は感じた。
「西村さんでしょうか」
声をかけられた明子が、痩せた長身の日本人に返事をする間もなく、一歩踏み出した早苗がひきとって答えた。
「私が西村です。牧野さんですか」
人見知りする様子の青年は不器用にお辞儀をして、早苗の父の会社からの指示で出迎えに来たことを告げた。縦じわをよせた額にかかる油気のない髪も、くたびれた服装も、この国際空港の輝きの中ではひどく場ちがいな野暮なものに見えた。
明子はあいまいな気持で一緒に歩きだした。何でも用事をさせようと早苗に期待をかけられている牧野礼二が気の毒でもあり、そのうえ自分までが便乗するかたちであることがためらわれた。だが遠慮してみても早苗はきかないだろうし、彼女自身も着いたばかりのパリで下宿まで送ってもらうことはありがたかった。
明子はパリに着いても出迎えのないことを覚悟していた。出発のとき、仏文の教授である父から「留学しようという者は、初めから依頼心を持ってはいけない。お父さんはパリに知人もあるから出迎えを頼むこともできるが、自分のことは自分で始末するんだな」といわれた言葉、というより声が、子供っぽく感じやすくなっているらしい心に聞こ

えてきた。
牧野が遠慮がちに早苗に、声をかけた。
「すみませんが、ちょっと待っていただけませんか。実は……日本人の画家が死にまして……自殺したのですが……その遺骨がいま日本へたつところなのです」
牧野は自殺した画家について小声で語り、二人から離れて、日本人が集まっているベンチへ近づいていった。早苗と明子の位置からも、白木の位牌を膝に前こごみに腰かけている老人の姿が見えた。生前の画家と親しかった日本料理のコックで、久しぶりの帰国に若い友人の遺骨を運ぶことになったと牧野は語っていた。
明子は何かえたいの知れない恐怖が、寒気のように背筋を走るのを感じた。広いロビーには全面ガラスの大窓から外光が射しこみ、それを白い大理石がさまざまな角度で受けとめる中を、人の波が一つのリズムに乗って流れていた。そして、絶えず移動する華麗な色彩の人間模様の一点に無惨に印された大きなシミのように、日本人の一団が重い湿気を含んだ姿をよせ合っていた。彼らの服装は一様に濁った暗い灰色で、肩の線もなえ、太いズボンはあいまいな線で古靴の上に垂れていた。
歩き、話し、笑い、抱き合う人々の動きが、絶えず明子と早苗の周囲をめぐっていた。日本人の一団はしばしば遮られて見えなくなり、また、もとと全く変わらぬ姿で現われてきた。彼らのまわりは空気までが遮断されているように、周囲の人々の発散する活気と無関係に静まっていた。えんじ色の制服のスチュワーデスが、ミンクのコートに大きな帽子の婦人が、黒オーバーの白髪の英国紳士が、キャメル・コートのアメリカ人が歩いていったが、彼らはロビーに違和感をあたえている東洋人の暗い一団を故意に無視しているように見えた。
ぴったりと身についた紺の制服のスチュワーデスが明子の横を通ってベンチに近づき、老人に話しかけた。左右の二、三人が肩を寄せあい、一様に長身の彼女を仰いで、短く答えていた。金髪にふちどられたスチュワーデスの顔に職業的な微笑がぴったりはりついていたが、老人は彼女の糊のきいたブラウスの固い白さに圧倒されたように、いっそう背をかがめて位牌を抱きかかえた。それはパリの国際空港のざわめきの中では、異様な情景であった。そして当然のことながら、老人の持つ長方形の木片が何であるかを理解しない周囲の人々との対照が、自殺した画家の生涯を

いっそう痛ましいものに感じさせた。
パリの裏街で、六年間ほとんど人にも会わず絵を描きつづけた画家は、最後の期待をかけた画商にも断わられ、アトリエとは名ばかりの陋屋で縊死したという。自分の才能に失望したのか、なお自負するところのあった才能を認めてくれないパリに絶望したのか、いずれにせよこの非情な大都会にジリジリと押し潰され、抵抗する力も失っての死ではなかったか……。
老人の横に、画家の妻であったというハンガリーの婦人が赤ん坊を抱いていた。だらしなくはおったオーバーの裾から投げ出された脚の、片方の靴下がゆるんでシワがよっていた。彼女の乾いた白い皮膚にも、薄いブルーの瞳にも生色がなく、悲しみさえももはや心に触れてこないように――その顔は死んでいた。
「牧野さんって、非常識な人ね。パリに着いたばかりの私たちにいきなり自殺した人の話を聞かせるなんて……」
声もひそめぬ早苗の話し方に、明子は思わずまわりを見まわした。
「あら！」と早苗の声にはずみがついた。「いいわね、あの豹のコート！」
明子は腕を押えられて、早苗の視線を追った。黄色地に鮮やかな黒の斑点の豹で体を包んだ女性が、周囲を見まわしながらゆっくりと近づき、二人の前を通り過ぎて止まった。ふり返ってまた左右を眺めていた視線がピタリと一点に止まり、冷たい表情が急に動いて、唇が花の咲くように開いた。その微笑を受けとめて足ばやに近づく黒いオーバーの胸に、倒れかかるようにより添うしなやかな身のこなしを、豹の持つ光沢が見事に浮き彫りにした。
早苗はもたれかかるように明子に体重をかけ、大階段の方へ去る二人の後姿に見とれていた。
「私、さっきから気をつけて見ていたけど、すばらしいと思う人はそうたくさんはいないわね。案外つまらない、平凡な服装の人が多いじゃないの。ここは国際空港だから、よその国の人が多いせいかしら……大したことないわね」
明子は早苗にうながされて、ロビーの中央に置かれたガラスのケースを眺めた。透明な寝棺のように並べられたケースの中には、ビロードの布の上に人造宝石の装身具が無造作をよそおって配置され、そのきらめきの中から漆黒の女の片手が伸びて、一連の真珠のネックレスを形のいい指先でつまみ上げていた。立ち止まる人もないケースのどれ

からも商品の持つ媚びが、受け止められぬままにガラスを通して発散していた。その屈折する光が明子にはひどくむなしいものに思われ、またいつか彼女は日本人の一団に注意を向けていた。

「お待たせして、すみません」

牧野が恐縮した様子で帰ってきた。明子は大階段の方へ歩きながら、はじめて牧野に話しかけた。

「あの、お位牌だけ見えましたけれど、遺骨はおじいさんのオーヴァーナイト・バッグの中にでも納められていましたの？」

「いや、僕たちもはじめは簡単にそう考えていたのですが、オルリーから羽田まで遺骨をずっと膝にのせ続けることは不可能ですし、バッグに入れれば足の下に置くことになります。棚には固いものはのせられないということで、結局、荷物と一緒に航空会社に預けてしまったのです。しかし空港まで別れを告げに来る人があるというので、老人は自分で位牌を作ったのです」

大正時代に日本を出た人というが、明子はパリで思いがけず保存されていた古い日本を見せられる思いだった。大階段を下りると、彼女の行くてに見えるカウンターで計量された荷物が次々にベルト・コンベアーにのせられ、機械的に運ばれて貨物室の口へ吸いこまれていた。明子は、画家の遺骨も、人の手にさえ守られず、スーツケースなどの間にはさまれてベルトの上でゆすられ、今は光もささぬ飛行機の底に積みこまれているのだろうと思った。

「人間としてフランスに来ても、死んで火葬され骨壺に納められると、もう人間でないことは確かですが、出国の法律的手続きが大へんむずかしいのです……」

明子は思いがけない刃物の冷たさが首筋に触れたように感じた。人間が他国の領土で命を失うことは、異常な条件をそなえた物質と化すことなのだろうか。明子は、日本で育った誰とも同じく、国境というものを意識したことがなかったが、それは祖国に帰ろうとする死者にまで冷たい干渉の手をのばす無気味な障壁なのだろうか。

パリへ向かうタクシーの中で、早苗は興奮に押されるように高い声で話しつづけた。

「私、ピアノのリサイタルやなんか、できるだけ聴きに行くつもりですの。切符は簡単に買えますの？　こちらの音楽会は夜何時頃すむのかしら？　すんでからゆっくりお食事をする場所、あるんでしょうね？」

牧野はどの質問にも簡単な言葉で答えていたが、早苗はそれさえ十分には聞かないで次の話題に移っていた。

豊かな家庭の一人娘として育った早苗は贅沢もわがままも人一倍許されていたが、良家の子女が当然受けるはずの制約さえ近年の彼女はわずらわしく感じていた。パリへのあこがれは、パリで持つであろう自由な生活へのあこがれでもあった。そして彼女にとって自由とは、欲望をそのまま行動に移すことであった。それは自分の中にある可能性の限界をためす奔放な喜びが感じられ、悲壮感さえ伴ってこころよかった。早苗が持つと信じるピアノの才能をパリで磨くことは、華々しい名声への空想と一直線に通じていた。女流ピアニストとしてヨーロッパにとどまるか、派手に日本の楽壇に迎えられるか……いずれにしろ、それは彼女の選択次第であるはずだった。

六歳から始めたピアノを、早苗はいつも周囲から賞めそやされ、才能を自負していた。その自負心を初めて傷つけられたのは、数ヵ月前の音楽コンクールのピアノ部門で三位にしか入賞できなかった時であった。彼女はこの順位の狂いを納得しなかったが、周囲は「審査員はあなたの先生の反対派」、「情実があった」など、コンクールの権威を引き下ろして相対的に早苗をもち上げる無責任なおもねりで慰めた。しかしそれで機嫌をとられるほど子供でもお人よしでもなく、その口惜しさと怒りから、長年望んでいたパリ留学の決意を固め、両親の反対をがむしゃらに乗り切った。パリで世界的な師につき、有無をいわさぬ結果を出してみせると、早苗は単純に想像することができた。

「まあ、きれい！」

明子が思わず言った。自動車専用道路の左側に遠く、パリ南郊の岡に建てつらなる白い街が蜃気楼のように浮き上がって見えた。

「空港からパリまで、私はもっとにぎやかな道を通るのかと思っていたわ」早苗が失望した声で答えた。「パリのまわりって、いなかなのね」

やがてタクシーが、やわらかいクリーム色の光に満ちた地下道にすべりこんだ。

「まあ、きれいな色！」今度は早苗の華やいだ声がはずむように響いた。「パリに着いて早々、自殺した人のお位牌なんか見せられていやだったけど、こんなきれいなトンネルを通ると、本当にパリに来たんだなあって気がして、楽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

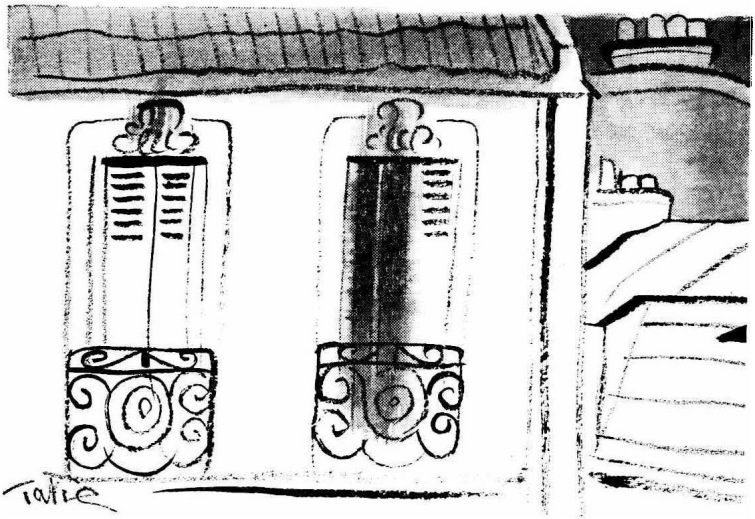
しくなるわね……」
明子は早苗の言葉が牧野の気持を傷つけはしないかと気にしながら、黙ってうなずいた。
クリーム色にきらめくS字状のトンネルをくぐりぬけて間もなく、車は右折して、はじめてパリ市街の外郭に向き合った。七階建ての灰色の壁面の上部に、規則正しくマンサルド型の窓をあけた鉛の屋根が同じ高さに連なっていた。その家並にはいろうとする位置に立つ、冴えたブルーの長方形のプレートに〝ポルト・ドルレアン・ジェネラル・ルクレール〟の白い文字が鮮明に浮かんでいた。明子は父の留学時代の話や、本の中でだけなじんでいたこの由緒ある地名が、いま現実に目の前に迫ってきたことに軽い興奮を覚えた。ここは第二次大戦末期、一九四四年八月にルクレール将軍指揮下のパリ解放軍が入城した地点であることを、明子は東京で何度か読んでいた。彼女はいま背にしているオルレアン街道の名に、十五世紀のジャンヌ・ダルクの歴史を思い、また剽盗として逮捕されたフランソワ・ヴィヨンの名を思い浮かべていた。
「お店に並んでいるもの、ご覧なさいよ」早苗が高い声でいった。「こんなつまらない品、東京だってよほど場末に行かなければ見られないわ。これが本当にパリの中なの？牧野さん、私の住む所、まさかこんなじゃないでしょうね」
牧野は困ったように弱い笑いを浮かべていた。冬枯れの枝先を薄墨色のレースのように組み合わせた街路樹の続くアンヴァリード通りにはいると、やっとパリの街は早苗のイメージと重なってきた。彼女は窓ガラスに額をつけるように身をよじって外を眺め、丸い広告塔に張られたポスターのソ連のピアニストの名前を声をたてて読んだ。
「リフテル！　まあ、すごい！　いつ弾くのかしら？」
「……ここがナポレオンの墓です」
ありふれた会話さえ器用には受け答えのできない牧野が、戸惑ったようにどちらへともなく言った。
「高辻さんの下宿のあるアヴニュー・ド・ラ・モット・ピッケはもうそこです」早く初対面の二人の女性から逃れたい、居心地の悪そうな声だった。
一直線に長く続く、黒くいかめしい鉄格子の中に、石と枯れた芝の長方形の前庭を隔ててナポレオン廟の丸屋根が、鉛色の地肌に沈んだ金色の飾りを盛り上げていた。ルネッサンス以後の最も優れたドーム建築と讃えられる廟は威厳

を湛え、明子が写真などで想像していたものから全くかけ離れた大きさと重さで、周囲の暗い空気を押しかえしていた。

タクシーが停まると、それが思いがけないことであったように早苗は明子の腕を押えて言った。

「あさって、会いましょうね。あす一日は休んで、あさっての朝十一時に大使館に手続きに行くのよ。大丈夫？」

何を大丈夫かと聞かれたのか考える余裕もなく、明子はうなずきながら急いで車の外に出た。そこには、今まで通ってきたどの通りとも似ている、道幅の広い、枝をはらってコブのある幹だけが立つプラタナス並木の静かな通りがあった。明子は大きな木の二枚扉の上の番地を確かめ、改めて建物を見上げたが、それは左右に続く建物の中で一軒だけ陥没したように低く、石の肌の黒ずんだ色を恥じてひっそりと身をひそめているような家だった。中庭まで薄暗い通路があり、庭に出る手前の右の、上半分にガラスのはいったドアからいっそう暗い屋内に足を踏み入れると、すぐ階段が見えた。長年磨きぬかれた艶のある木の手すりのついた階段は、明子の荷物を下げた牧野の靴の下でかすかにきしんだ。



三階のドアの前に荷物を下して「では」と牧野ははにかんだような微笑を浮かべた。

「ありがとうございました」

明子はもっと感謝の気持を伝えたかったが、とっさに言葉が見つからず、丁寧に学生らしいお辞儀をした。

初めて一人になった明子が、そっとベルを押すと、何か厚い層を感じさせる奥でこもった響きをたてた。マダム・ルチーナ・リヴィエール——明子は父の友人が探しておいてくれたこの下宿の女主人についても、その家族についても何も知らなかった。

「マドモワゼル・タカツジ？　お待ちしていました」

静かに開かれたドアの内側に右手をかけ、こごむような姿勢の黒衣の老婦人が、やさしい微笑を明子に向けていた。

「お荷物がありますから、まずあなたのお部屋へご案内しましょう」

古典的な美人だったろうと思われる灰色の髪のルチーナは、明子と並んで立つとほぼ同じ背丈で、黒衣の上に手編みらしい黒毛糸の三角に折ったショールをかけていた。

「長い旅でお疲れでしょうね。日本からフランスへ……わたしは飛行機に乗ったことがありませんし、あなたのなさ

った長い旅は想像もつきませんわ」
弱々しく唱うような旋律のある声だった。
「距離は長いのですが、北極まわりで十八時間ほどです」
まあ、というようにルチーナは素直な、子供のような驚きを現わした。ルチーナの態度や話し方はおどおどしているともいえるほど控え目で、明子はふと彼女を世馴れない尼僧のように感じた。全身を黒一色で包んでいる老婦人に、尼僧の白いかぶりものが似合うのではないかしら……と想像するほど、明子は気持が楽になっていた。
「ここがあなたのお部屋です。お気に入るといいのですが……」
金具の大きなドアを開きながらルチーナはふり返って、小首をかしげ微笑を見せた。
木製のベッド、洋服タンス、机、化粧台をかねた鏡つきの整理タンスなど、家具はすべて古風な浮彫りと曲線を持ち、長年磨かれた栗色の木肌に疲れと艶を浮かべていた。一面に敷かれた絨毯の花模様は色あせていたが、隅々まで掃除がゆきとどき、女主人のきれい好きを語っていた。
「いいお部屋ですこと！」
内庭に面した窓の外に鳩が飛び、蔦をはわせる木格子をとりつけた高い石塀と、その向うの、三色旗を扉の上に掲げた建物との間に子供の声が反響していた。
「小学校があるのですよ」
ルチーナがいった。
「わたしのむすこのレイモンも小さい時にかよっていました……。ミミ」
灰色の美しい毛並の猫が、老婦人の足許に身をすりよせて明子を見上げていた。銀色の目も、太く長いしっぽも、見馴れぬ闖入者をとがめるようにいかつかった。
「ミミ！」
ルチーナは重そうに猫をだき上げて、ベッドに腰をかけた。
「私の唯一の家族です。今まで私とミミだけがこの家に住んでいました」
猫はものうい様子で、ルチーナのショールに顔を埋めた。
「部屋を人にお貸しするのは初めてのことです。何か不便なことがあったら、おっしゃって下さい。ここはむすこの部屋でした。レイモンは兵隊にとられるまで、この部屋で暮らしていたのです。……アルジェリアで戦死しました。なんということでしょう……」

ルチーナの薄い鳶色の瞳がうるむような光を帯びた。
「二年前にレイモンが戦死してからも、私はこの部屋をもとのままにしておきました。夫にも、ひとりむすこにも死なれて一人ぼっちになった私に、この家を売りはらって、いなかにひっこむことをすすめてくれる人もあります。本当に、今の世の中と何のつながりもない私が、パリのまん中にいる必要はないのですが……。でも、夫やむすこが暮らしたこの家を離れる気持になれないのです。私の思い出はすべてこの家とつながっています。……思い出を奪われてしまったら、私は生きてゆく道づれを失うのです」
明子は机の前の椅子に坐って、ルチーナの静かな声に聞き入っていた。このすっぽりと体がうずまるような大きな椅子にも、かつてはレイモンという青年が坐って母と話していたのだろうかと、明子は腕木の彫刻を指先でそっと撫でた。
「フランスは年々物価が上がっていること、マドモワゼルはご存じですか。ここ数年、毎年、五から七パーセントぐらい上がっています。政府は物価対策をしているというのですが、私のように年金で暮らしている者の生活は、日に日に苦しくなってきます。それで、この家を維持してゆくことも困難になったので、亡くなった夫の友人にすすめられて、この部屋をお貸しすることにしたのです。
マドモワゼル・タカツジ、あなたのようなかわいいお嬢さんが来て下さって、本当に私は安心しました。私はあまり外へ出ることもなく、人さまとのおつき合いにも馴れていません。実はどんなお方と暮らすことになるのかと、心配していたのです……。
お疲れのところを、長話をしてしまいましたね。ゆっくりお休みになってまた食事の時にお目にかかりましょう」
一人になっても、明子はしばらくぼんやりと机に向かっていた。よく見ればにぶい光沢の中に無数の傷を持つ古風な机の、一番上のひき出しだけが明子のために修繕されたのか、ピカピカ光る真新しい金具をうちこまれていた。羽田をたったのが、日付ではきのうの夜であったとは信じられないほど、長い時間がすぎ、想像もつかなかった色々なものが心の中に積み上げられたようであった。飛行機の中からここまでの緊張が体の方々に固まったままのぎごちなさで、まだ自分の位置が見定められない不安定な気分であった。
ゆっくりとスーツケースを開いて、荷物の整理にとりか

かった。本や辞書は机の上に、下着類は一つ一つ白い紙を敷いた整理タンスのひき出しに納めた。下着のほとんどが真新しい品だが、古いものも丁寧につくろわれ、きちんとたたまれていた。明子は一枚ごとに、母の手の温かさを感じた。

家を出て以来着とおしていた紺のスーツを脱いで、楽なスカートとスウエターに着かえながら、明子は思わずほほえんだ。ピンクのカーディガンは弟妹三人からの贈物で、大きなリボンで結んだ包紙の上には「おうちの中で着て下さい」と幼い字で書かれていた。《にぎやかな茶の間の食卓で、今日からは誰が私の席に坐っているのだろうか。雅子が弟と妹のけんかを、私にかわってうまく納めているだろうか……》ただ一人、あき家に迷いこんだような静けさの中で、明子は初めて離れた我が家を思い浮かべ、定まらぬ感覚が東京とパリの間を揺れ動くのを感じた。

食卓でルチーナは明子の食物の好みなどを訊ねて、新しい下宿人に対するこまかい心づかいを示した。食事が終わると、

「コーヒーをあがりますか」と腰を浮かせながらいった。

「いいえ、夜はコーヒーいただきません」

「ああ、その方がいいでしょう。眠れないといけませんから……。では、カモミールをお茶がわりに飲みましょうね。この薬草は疲れた時には特にいいのですよ」

ルチーナは話し相手を得たことが嬉しいらしく、いそいそと明子をサロンの長椅子に導いた。食堂もサロンも明子の部屋と同じような古めかしい家具が置かれていたが、特にサロンの壁にかけられたニスの色の濃い宗教画と肖像画が、古道具屋のように実生活から離れた雰囲気をつくっていた。

薄黄色のカモミールに砂糖を入れてかきまぜると、どこかカビくさい東洋風の香りがただよった。

「お部屋は大へん居心地がよくて、すっかり気に入りました」

明子の言葉に、ルチーナは心から安心したようにほほえんだ。

「私が結婚して初めてこの家に住んだ時、あの部屋には夫の母がいました。私はフランス人ではなかったのですよ。ポーランドのクラクフという古い街の生まれです。

姑は孫の生まれるのを楽しみにしていたのですが、レイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com